

和漢の類書の構成及び部類標題の類型について —歳時部における四季・時間帯重視や時節・地儀の独自性を中心に—

中島 和歌子

1. はじめに

和漢の類書(以下、広く類聚編纂物の意で用いる)の構成及び部類標題(部門名、分類項目)には、それぞれいくつかのパターン(類型あるいは標準)がある。それらを踏まえ、主に『枕草子』の初段や、類纂本系統の『前田家本枕草子』の特徴について、考察を試みてきた(注1)。本稿では、パターンそのものについて再度取り上げ、主に平安時代の類書の特徴を改めて見ておきたい。前稿と重なる部分があることを、あらかじめお断りしておく。なお、時間帯の扱いについては、前稿を一部補足・修正する。

2. 順序・配列方法

2.1. 何部から始まるか

各書が時系列とは関係の無い「全体・全て」をどのような順で示すか、その配列方法は大きく次の三つに分けることができるだろう。これらは組み合わせて用いられることが多い。

- A. 発音順…イロハ、五十音、韻、アルファベットなど
- B. 形体順…文体(詩形も)、漢字の成り立ち(総画数、部首、四角號碼など)
- C. 意味順(内容順・分類順ともいえる)

今日では、例えば国語辞典はAの五十音順、漢和辞典はBの部首ごと(しかも画数の少ないものから)が一般的で、図鑑類はCだが、対象が幅広い百科事典になるとAが多いようである。しかし、古典籍ではCが少なくない。Cの分類概念の体系がオントロジと呼ばれている。

何らかの分類を施された古典籍の多くは、例えば以下の諸書のように、天(=天象・乾象)部、歳時(=時節・四時)部、帝王部、神祇部のいずれかから始まっている。仮に【天象型】【歳時型】【帝王型】【神祇型】と名づけておく。これ以外にも、四部(経・史・子・集)、年中行事・臨時、天竺・震旦・本朝などの分類があるが、いずれにしても、重要とされるものが先に置かれているといえるだろう。

以下、参考の為に唐代以後や平安時代以後の書も一部取り上げる。表の見方は次の通りである。

- ①書名の欄は、中国の書には*を付した。()付きの書の場合は、部門名等の欄に参考となる本文を掲げた。
- ②部門名等の欄は、基本的に巻数を省略した。()内は下位分類であるが、本文に関する注記の場合もある。[]は本に無い総称を補ったものである。注目すべき分類語彙はゴシック体とした。
- ③備考欄の○は巻末に動植物が来るもの、△はほぼ巻末といえるものである。

【天象型】

書名	部門名等	備考
(*千字文)	天地玄黄, 宇宙洪荒, 日月盈昃, 辰宿列張…	
*藝文類聚	天部上, 天部下, 歳時部上, 歳時部中, 歳時部下, 地部…	
*初学記	天部上, 天部下, 歳時部上, 歳時部下, 地部上, 地部中, 地部下…	
*白氏六帖	第一卷(天, 地, 日, 月, 星, 明天文, 晨夜, 律歴), 第二卷(律呂, 雲, 雨, 雪, 風, 霞, 霰, 虹, 天河, 霜), 第三卷(霧, 氷, 火, 灰, 塵, 叙四時, 春…)	部名ナシ
*李嶠百二十詠	乾象部(日, 月, 星, 風, 雨, 煙, 露, 霧, 雨, 雪), 坤儀部(山, 石…	歳時ナシ
*事類賦	天部, 歳時部上(春, 夏), 歳時部下(秋, 冬)…	
*太平御覽	天部, 時序部, 地部, 帝王部…	

新撰字鏡・巻一	天部, 日部, 月部, 肉部, 雨部, 氣部, 風部, 火部, …部, 人部, イ部	部首ごと
二十卷本和名抄	巻一(天部, 地部, 水部, 歳時部), 巻二(鬼神部, 人倫部, 親戚部) …	
十卷本和名抄	天地部, 人倫部, 形体部, 疾病部, 術芸部 …	歳時部ナシ
(源順集)	天地, 星空, 山河, 峰谷, 雲霧, 室苔, 人犬, 上木, 硫黄(ゆわ)猿, 生ふせよ, 桜の枝を, 馴れ居て	
口遊	乾象門六曲, 時節門九曲(歳旦拜天地四方諸神芳誦…), 年代門, 坤儀門 …	
色葉字類抄	天象付歳時, 地儀部付居処并居宅具, 植物付植物具, 動物付動物体 …	イロハの下
扶桑集	天, 歳時上, 歳時下, 地, 山, 水, 帝徳…梵門, 木, 花, 草, 鳥, 獸, 虫, 魚	○
江吏部集	天部, 四時部, 地部, 居所部…飲食部, 火部, 木部, 草部, 鳥部	○
本朝文粹・詩序	天象, 時節, 山水, 帝道, 人倫, 人事…聖廟, 法会, 山寺附僧坊, 木, 草, 鳥	○
文鳳抄	天象部, 歳時部…宝貨, 服用, 饒食, 乘御, 草樹, 鳥獸, 魚虫, 方角, 光彩, 略韻	△
擲金抄・下	天象, 天時, 地儀, 居処, 植物, 動物, 人倫, 人事, 雜物, 神靈, 仏法, 釈奠 …	本文乾象
明文抄	天象部, 地儀部, 帝道部, 人倫部, 人事部, 神道部, 仏道部, 文事部, 武事部 …	天象部に歳時
万葉集・巻七雜歌	詠天, 詠月, 詠雲, 詠雨, 詠山, 詠岡, 詠川, 詠露, 詠花, 詠葉, 詠蘿, 詠草 …	
類聚古集・巻十六	乾象部, 坤儀部, 屋舎部付垣, 水部, 海部 …	歳時部ナシ
十題百首	秋篠月清集(天象, 地儀, 居処, 草部, 木部, 鳥部, 獸部, 虫部, 神祇, 釈教) 拾遺愚草(天部, 地部, 居処, 草, 木, 鳥, 獸, 虫, 神祇, 釈教)	各十首
能因歌枕	天地, 道, 夜, 山, 日, 朔月(略本朔日), 月, 晦, 風, いなおほせ鳥 …	
綺語抄	上(天象部, 時節部, 坤儀部, 水部, 海部), 中(神仙部, 人倫部, 官位部, 人行部, 言詞部, 居処部, 舟車部, 珍宝部, 布帛部), 下(動物部, 植物部)	一動・植物型 ○
俊賴髓腦・異名	天, 地, 塩海, 水海, 嶋, 磯, 浪, 海の底, 河, 山, 野, 巖, 高峯, 峯, 谷 …	
和歌童蒙抄	天部, 時節, 地部, 人部, 人礼部, 居所部, 宝貨部, 文部, 武部, 伎芸部, 飲食部, 音楽部, 漁獵部, 服饒部, 資用部, 仏神部, 草部, 木部, 鳥部, 獸部, 魚貝部, 虫部, 雜体, 歌病, 歌合判	本文地儀部 △
奥義抄・異名	天, 日, 月, 雨, 風, 霧, 樹雪落, 水上雪, 地, 山, 峯, 野, 河 …	
初学抄・異名	天, 日, 月, 星, 雲, 風, 雨, 霧, 霜, 雪, 樹雪落, 時, 春, 夏 …	
和歌色葉・上・七	天象部, 地儀部, 海水部, 木草部付葛苔竹, 時節部, 神祇部, 人倫部 …	
八雲御抄・第三	天象部(天, 日, 月, 星, 風, 嵐, 雨, 雲…晴), 時節部, 地儀部, 居所部 …	
古事類苑	天部, 歳時部, 地部, 神祇部, 帝王部, 官位部, 封祿部, 政治部, 法律部, 泉貨部, 称量部, 外交部, 兵事部, 武技部, 方技部, 宗教部, 文学部, 礼式部, 楽舞部, 人部, 姓名部, 産業部, 服飾部, 飲食部, 居処部, 器用部, 遊戲部, 動物部, 植物部, 金石部	一動・植物型 △

【歳時型】

古今和歌集	春歌上・下, 夏歌, 秋歌上・下, 冬歌 …	
古今六帖・第一帖	歳時(春, 夏, 秋, 冬), 天	
類聚古集・巻一～五	巻一春部, 巻二夏部, 巻三秋部, 巻四冬部, 巻五天部, 地部, 巻六山部, 水部 …	短歌
同・巻十七と十九	長歌上(四時景物, 地理部, 人倫部, 珍宝部, 動物部, 辺国部), 下(相聞, 挽歌)	巻十八中欠
夫木抄	春部, 夏部, 秋部, 冬部, 雜部([天象]天, 日, 星…[人倫]…, 人事)	
千載佳句・上	四時部, 時節部, 天象部, 地理部, 人事部	
和漢朗詠集・巻上	春, 夏, 秋, 冬	
本朝麗藻	上巻(春, 夏, 秋, 冬), 下巻(山水, 仏事, 神祇…懷旧, 述懷)	春冬は推定
堺本枕草子	[歳時]春は曙の空, 頃は, 節は, [天]降るものは, 風は, 霧は, [草木] …	日月等は後

前田家本枕草子	[歳時]春は、頃は、節は、正月一日は、夏は、冬は、[天]日は、月は、星は、雲は、霧は、風は、降る物は、[地]山は、峯は、岡は…	
簾中抄・上	年中行事、帝王、斎宮、斎院、女院、摂政・関白	
拾芥抄・上本	歳時部（在節日歳旦、天地四方拝。）、歳運部、大歳名部、人年名部…文筆	

【帝王型】

*北堂書鈔	帝王部、后妃部、政術部、服飾部、舟部、車部、酒食部、天部、歳時部、地部	動植物ナシ
本朝無題詩	巻一（行幸、宴賀付賀勸学院新成、尚齒会）、巻二（天象、時節、地儀、植物、動物、人倫、雑物、屏風付画障）、巻三（花下、月前、七夕付後朝）、巻四（春付閏三月、夏）、巻五（秋、冬付歳暮、雑部）、巻六（水閣、池台付池亭池頭、泉亭、林亭、亭、別業付別庄別墅）、巻七（山家、田家、野点、旧宅、山村、野外、河辺、旅館付路次）、巻八（山寺上）、巻九（山寺中）、巻十（山寺下、雑寺、禅房、山洞）	巻二は人事後型 巻三も歳時 巻四・五も歳時

【神祇型】

類聚国史	神祇部、帝王部、後宮部、人部、歳時部(年中行事)、音楽部…	
延喜式	神祇官（四時祭上・下、臨時祭、伊勢大神宮…）、太政官…雑式	
二中歴	神代、人代、后宮・女御…	
古今著聞集	神祇、釈教、政道忠臣、公事、文学…怪異、変化、飲食、草木、魚虫禽獸	○
群書類従	神祇部、帝王部、補任部、系譜部、伝部、官職部、律令部…雑部	

中国の類書は、隋代の『北堂書鈔』が【帝王型】である以外、全て【天象型】である。

逆に、【歳時型】は和書のみである。歳時部から始まるもののあることが、まず平安時代の類書の第一の特徴といえるだろう。そのうち、『千載佳句』や『古今六帖』、それを増補した『夫木抄』、類纂系統の『枕草子』は、後に天象部がある(4節でいう【天象独立型】)。しかし、他は独立した部として天象部を持たない(【天象歳時融合型】)。より一層、歳時(特に四季、4節参照)最優先の姿勢がうかがわれる。

佐伯雅子氏は、公卿や起家の文士による『和漢朗詠集』『本朝麗藻』は天象部を持たず、『古今集』などの勅撰和歌集に近いが、『千載佳句』編者大江維時の孫の匡衡による『江吏部集』や藤原明衡の『本朝文粹』は、漢文学の伝統的な分類を行っていると言われている(注2)。前者がここでいう【歳時型】、後者が【天象型】である。

後者【天象型】に、長徳年間成立の紀齊名による『扶桑集』、1200年頃成立した菅原為長(1158～1246)による詩文の語彙・摘句集『文鳳抄』と、南家藤原孝範(1158～1233)による類似の書『擲金抄』や、孝範による故事金言集『明文抄』も加えることができる(但し後者は、『文選』『雪賦』の後、『後漢書』『夫春者歳始也』から歳時となり、節日や年中行事を季節順に挙げて漏刻で終わる。『擲金抄』の「天時」という語と併せて、孝範は歳時部の天との関係を重視しているようである)。また、平安後期の歌学書(歌枕)も【天象型】である。前稿では『枕草子』の初段は天象と歳時(四季及び時間帯)の両方を持ち、どちらかだけではなく、どちらをも同時に冒頭となし得ていることを述べた(類纂本系統の堺本と前田家本は、逆にこれらを分けている)。なお、元旦の天皇による天地四方拝は、天、歳時、神祇、帝王の四つ全ての要素が揃った、年の始まりにふさわしい年中行事といえる。

【帝王型】の二書も、後に天象部を持つ。但し『本朝無題詩』は、人事が全て前にある『北堂書鈔』を見習ったものではない。また、巻二に限っていうと『本朝無題詩』は他の漢詩文集や詩学書と同じく【天象型】で、「植物・動物」の後に「人倫」がある【人事後型】である(次項参照)。

【神祇型】は、『古今著聞集』の動植物を含めて、人事のみを対象とした書に限られる。これも和書のみである。

2.2. 全体的な構成、人事の位置、何部で終るか

「天地人」の「人」の位置は、中間・後・前の三通りがある。多くの書が【天象型】もしくは【歳時型】で、しかも動植物の部で終るので(○△参照)【人事間(じんじあいだ)型】である。これは動植物が人事の後か前かという問題なのだが、動植物部の無い『北堂書鈔』のような書もあるので、便宜的に人事の位置で分類しておく。境目に「/」を入れた。「居処部」は、「地部」の続きとも人事の中ともされて両義的なので、各書の扱いに合わせた。

なお、歳時部の中の、例えば「寒食」などの節日・年中行事や「暦」なども広くいえば人事であるが、時間概念があり、「天」との関わり方を示すものである。それに対して、人倫部、人事部(狭義)、居処部等々は時間概念が無い。よって両者は区別できる。ここでいう人事とは後者のみを指している。

【人事間型】多数

もしくは【動植物後型】【無生物・生物型】

	[天象]もしくは[歳時]…/[人事]…/[動植物]…	
--	----------------------------	--

【変形人事間型】

和歌色葉・上 七通用名言者	天象部, 地儀部, 海水部, 木草部付葛苔竹, 時節部/神祇部, 人倫部, 資具部, 居 処部/畜類部付禽獸虫	植物と動物 が離れる
------------------	--	---------------

【人事後型】

もしくは【動植物間型】【自然・人事型】

*李嶠百二十詠	乾象部, 坤儀部/芳草部, 嘉樹部, 靈禽部, 祥獸部/居処部, 服玩部, 文物部, 武 器部, 音楽部, 玉帛部	
擲金抄・下 絶句部目録	天象(本文は乾象), 天時, 地儀, 居処/植物, 動物/人倫, 人事, 雑物, 神靈, 仏法, 釈奠, 読書, 詠史, 文学, 祝言	
万葉集 巻七・雑歌	詠天, 詠月, 詠雲, 詠雨, 詠山, 詠岡, 詠川, 詠露/詠花, 詠葉, 詠蘿, 詠草, 詠 鳥/思故郷, 詠井, 詠倭琴…	
類聚古集 巻一〜十五	春部, 夏部, 秋部, 天部, 地部, 山部, 水部/草部, 木部, 竹部, 葛部, 鳥部, 獸 部, 魚部, 虫部/財貨部, 衣服部, 器物部, 琴酒部, 居処部, 舟馬部, 恋部, 神仏 部, 人倫部, 慶賀部, 愁歎部, 餞別部, 離別部, 羈旅, 挽歌, 有由縁歌, 戲咲歌	恋部上・下 (巻九・十) 欠
同・巻十六	乾象部, 坤儀部, 屋舎部付垣, 水部, 海部, 舟馬部/植物部, 動物部/服饒部, 財 貨部, 神祇部, 人倫部, 人事部, 恋部, 別部, 雑歌載不審歌等, 挽歌	東歌防人歌 本文離別部
奥義抄 二十三 物異名 付十二月名	[天]天, 日, 月, 雨, 風, 霧, 樹雪落, 水上雪, [地水]地, 山, 峯, 野, 河, 高峯, 海, 塩海, 水海, 巖, 道, 庭水, [居所]京, 平城宮, 内裏, [歳時]春, 夏, 朝, 時, 曉, 腕/[植物]草, 壁草, 花, 果, 薦, [動物]鶯, 鶴, 鹿, 猿, 蜚, 蛙, 蜘蛛/神, 帝, 東宮, 中宮, 大臣, 中少将, 衛門, 兵衛, 男, 女, 婦, 下人, 賤男, 盗人, 別, つらき事, 夢, 書, 筆, 簾, 和琴, 酒, 人形/正月〜十二月	
八雲御抄 第三・枝葉部	天象部, 時節部, 地儀部, 居処部, 国名部/草部, 木部, 鳥部, 獸部, 虫部, 魚部 /人倫部, 人事部附人体, 衣食部, 雑物部付調度, 異名部, 権化部	
夫木抄	春部, 夏部, 秋部, 冬部, 雑部([天象]天, 日, 星…/動物上, 動物下, 植物上, 植 物下/居処上, 居処下, 雑物上, 雑物下, 神祇付宮, 釈教付寺, [人倫], 人事)	一動・植物型
色葉字類抄	天象, 地儀/植物, 動物/人倫, 人体, 人事, 飲食, 雑物, 光彩, 方角, 員数, 辞 字, 重点, 量字, 諸社, 諸寺, 国郡, 官職, 姓氏, 名字	イロハの下 の「部類」
前田家本	[歳時]春…, [天]日…, [地]山, 峯, 岡, 野, 原, 森, [水]川, 淵, 滝, 池, 井, 湯, 海, 浜, 崎, 浦, 島, [居所]関, 駅, 渡り, 橋, 陵, 里, 市, 屋, 家, 夏の室礼, 冬 の室礼, [寺社]社, 寺/[植物]木の花, 木, 草の花, 草, [動物]鳥, 虫, 馬, 牛, 猫	「は」略

	／[仏神]…[人倫]…[官職]…[疾病]病, [見物]見物, [諸芸]…[装束]…[服飾・調度]	
--	--	--

【人事前型】

もしくは【人事・自然型】

*北堂書鈔	帝王部, 后妃部, 政術部, 服飾部, 舟部, 車部, 酒食部／天部, 歳時部, 地部	動植物ナシ
古今著聞集	神祇, 釈教, 政道忠臣, 公事, 文学・怪異, 変化, 飲食, 草木, 魚虫禽獸	天地歳時ナシ

まず最も多い【人事間型】は、動植物が後に来る【動植物後型】でもあり、天地や歳時と、人以下動植物までの生き物とに二分する方法でもあるので、【無生物・生物型】と使い換えることができる。命あるものの中で人を上位とするのは、仏教の六道において「人間」を「畜生」の上とするのと同じである。表には挙げていないが、『経律異相』が「天地部」に始まり「畜生部, 虫畜生部, 地獄部」で終わるのが、六道に拠った最も明らかな例といえる。但し、「畜生」には植物は含まれない。この点、【変形人事間型】とした『和歌色葉』は、植物と動物とを離し、植物は人事の前、動物は末尾に置いているので、「人間」・「畜生」の順位が最もよく反映されているといえるだろう。天地及び植物、人及び動物の二組に分ける方法でもある。

一方【人事後型】は、動植物の部が巻末ではなく、天地の後、つまり天地と人事との間にある【動植物間型】である。天地及び動植物と人に二分する方法でもある。【自然・人事型】ともいえよう。【人事前型】は、その逆だが、『北堂書鈔』には動植物の部は無い。よって、自然(天地+動植物)と人という二分法を用いた中国の類書は、詠物詩集『李嶠百二十詠』のみということになる。【自然・人事型】は日本的な分類・配列方法といってよいのではないか。そしてこのことが、天象と動植物を同列に扱うことの多さと繋がっているのだろう。例えば、「風雲月露」は天象のみであるが、主に日本の自然美を表わす熟語のうち「雪月花」(『白氏文集』巻二十五「寄殷協律」,『枕草子』「村上の子の帝の御時に」など)や、「花鳥風月」(『風姿花伝』『庭訓往来』など)は、天象と動植物である。

なお上野理氏が、『枕草子』初段の構想の変遷という視点から、ほとんどの書が動植物で終ることに注目して、初段の鳥, 虫がそれに当たり、初段は天象から動植物まで自然物全てを表現していると述べられている(注3)。それは、ここでいう【人事間型】である。氏は間にある人事には触れておられないが、類書と同じく初段は「人」の存在も重視すべきであり(さらには「火」や「炭櫃」などの器物も)、自然だけでなく、天地人、全てが表現されていると見るべきだと前稿で述べた。

2.3. 動植物の順

上で見たように【人事間型】つまり【無生物・生物型】が多いことから、「鳥獸草木」という熟語からも、また今日の「動植物」という熟語(注4)からも、より人間に近い動物が先に来る場合が多いと思われるが、実際は、植物が先の【植・動物型】がほとんどである。【動・植物型】も無いわけではないが、一般的とはいえない。この点は、中国・日本の差が無いようである。やはり「畜生」が最も下位、末尾に相応しいということであろうか。『類聚名義抄』は仏・法・僧に分けており、他の類書の分類・配列とは異なるが、僧・中末尾に「…車, 羊, 馬, 鳥, 隹」, 僧・下に「魚, 虫, 鼠, 龜, 竜, 鬼, 風, 酉, 雜」とあり、やはり動物のほとんどが巻末近くに置かれている。

【植・動物型】他にも多数

*藝文類聚	…火部, 藥香部, 草部, 宝玉部, 百穀部, 布帛部／果部, 木部／鳥部, 獸部, 鱗介部, 虫豸部／祥瑞部, 災異部	△
*初学記	…器物部, 宝器部／花草附, 果木部／獸部, 鳥部, 鱗介部, 虫部	○
千載佳句・下	宮省部, 居処部／草木部／禽獸部／宴喜部…	
(三宝絵詞)	木草／山川／鳥獸, 魚虫	序
(枕草子)	木草／鳥虫 草木／鳥虫	跋 38 段
藻塩草	…巻八草部, 巻九木部／巻十鳥類, 巻十一獸部, 巻十二虫部, 巻十三魚部／…	

禁秘抄	上 (賢所…南殿, 草木…女孺), 下 (詔書…明經論, 雪山, 犬狩, 鳥, 虫)	
-----	--	--

【動・植物型】他に『綺語抄』『夫木抄』『故事類苑』

* (論語)	鳥獸／草木	陽貨篇
* 白氏六帖	…第九十四卷 (鳥…鳥), 第九十五卷 (鵲…鵲, 蟬…蝶, 虫鳥, 獸, 龍, 麟), 第九十六卷 (馬, 牛, 羊), 第九十七卷 (虎…驢), 第九十八卷 (猪…魚, 龜…鳥獸言) / 第九十九卷 (草木, 草, 雜草, 木, 雜果…胡桃), 第一百卷 (蒲桃…桑)	○
* 太平御覽	…神鬼部, 妖異部／獸部, 羽族部, 鱗介部, 虫豸部／木部, 竹部, 果部, 菜部, 香部, 藥部, 百卉部	○
二十卷本和名抄	…船部, 車部, 牛馬部, 宝貨部…調度部, 器皿部, 飲食部, 稻穀部, 果廩部, 菜蔬部／羽族部, 毛群部, 鱗介部, 虫豸部／草木部	○
十卷本和名抄	…調度部／羽族部, 毛獸部, 牛馬部, 龍魚部, 龜貝部, 虫豸部／稻穀部, 菜蔬部, 果廩部, 草木部	○

【動・植・動物型】

* 事類賦	…飲食／禽, 獸／草木, 果／鱗介, 虫	○
-------	----------------------	---

【動・植・動・植物型】

古今六帖・第六帖	草／虫／木／鳥	○
----------	---------	---

『二十卷本和名類聚抄』の「牛馬部」は、「車部」との繋がりから見ると、十巻本のような動物としての位置づけではなく、運搬用の財貨である。また、「羽族部」の前に「飲食部」からの繋がり、「稲穀部, 果廩部, 菜蔬部」があり、最後に「草木部」があるので、別に【植・動・植物型】とすべきかもしれない。

『事類賦』や『古今六帖』の配列も独特である。後者は、「草に虫, 木には鳥」という連想に拠ると考えられる。

2.4. 連想的配列

前稿で述べたように、夙に平井卓郎氏が、「山」の部の「やま, 山どり, さる, 鹿」など、『古今六帖』の排列の特徴である「類推的連想的性格」は、「…池・浦・珠・玉・瑤璋・金・銅…」などのように、元になった『白氏六帖』にも見られること、『白氏六帖』はそれと「主知的合理的性格」との「相反する両面の性格」を備えていることを指摘されている (注5)。また三田明弘氏によると、『太平御覧』にも「説話集のような連想的連続性」があるという (注6)。例えば、「百穀部」と「飲食部」が食物, 「飲食部」と「火部」が調理というキーワードで共通する。

3. 時間帯の位置づけ

類書の中での時間帯の位置づけに関して、前稿では次のようなことを述べた。

- ①時間帯は、平安中期までは『白氏六帖』や『千載佳句』の天象部に萌芽的に見られるのみだが、平安後期の歌学書・詩学書では歳時部に纏まって見られる(ここでは前者を【時間天象型】、後者を【時間歳時型】と呼ぶ)。
- ②『千載佳句』は四時部にも「春暁, 春夜」以下、四季と時間帯が結びついた例がある(本稿5節参照)。『枕草子』に影響したのは、「春暁」や「夏夜」や秋の夜に限らないだろう。
- ③時間帯を含む日本的な歳時部の成立に、天象・歳時(四季)と共に「曙, つとめて, 昼, 夕暮れ, (日入りはてて), 夜」を初段に持つ『枕草子』が影響しているのではないか。
- ④藤原清輔(1104～1177)の著作『奥義抄』『和歌初学抄』や『和歌一字抄』に時間帯が見られるのは、『枕草子』からの直接的な影響が考えられる。

以下、若干補足・修正しておきたい。

- ⑤朝晩だけでなく「昼」も取り上げているのは、『枕草子』初段と『文鳳抄』(高唐賦序「怠テ昼寝タリト云」など)だけであると述べたが、古辞書の『色葉字類抄』、さらに『夫木抄』や後藤幸良氏が紹介された江戸末期の『源氏物語麻袋』(注7)にも昼がある。うち『夫木抄』が【時間天象型】なのは、『古今六帖』の増補だからであろう(歳時に景物を含む点も同じ)。『色葉字類抄』や『源氏物語麻袋』は一般的な【時間歳時型】である。
- ⑥但し、『色葉字類抄』は「天象」の付属として「歳時」があるので、連続している。特に昼(ヒ)に関しては境界が無い。前節で述べた『明文抄』の「天象部」と同様である。
- ⑦歌学書では基本的に異名が分類されており、早くは『能因歌枕』の「天地、道、夜、山、日、朔月、月、晦、風」のように天地や歳時が混在する中に「夜」があった。その後に『綺語抄』『俊頼髓脳』が続くが、清輔の著作以外にも顕昭の閲覧を経た『和歌色葉』があり、六条藤家の例が目立つ。
- ⑧『白氏六帖』は、天象部に当たる巻に「晨夜」があるが、直後の「律歴(曆)」は、他の類書では歳時部にある(4節参照、『初学記』は無い)。

【時間天象型】

*白氏六帖	第一巻(天、地、日、月、星、明天文、 晨夜 、律歴)、第二巻(律呂、雲、雨…)	
千載佳句・上	四時部 、 時節部 、天象部(月、風月、感月、雨、風雨、暮雨、雨夜、晴霽、雪、雪夜、春雪、晴雪、 曉 、 夜 、 閑夜)…	
和漢朗詠集・巻下	風、雲、晴、 曉 、松、竹、草、鶴、猿、管絃…酒、山、山水、水付漁夫…	
古今六帖・第一帖	歳時、天(天の原…三日月、 夕月夜 、 有明 、 夕闇 、星、春の風、夏の風…)	
夫木抄	春部、夏部、秋部、冬部、雑部一(天、日、星、雷、雲、雨、涕、虹、火、煙、塵、 曉 、 朝 、 昼 、 夕 、 夜 、東、西、南、北、巽、乾、坤、艮、彼岸)、雑部二…	

【時間歳時型】

綺語抄・上	天象部、 時節部 (春されば、春さりくれば、なつされば、あきされば、あきづけば、ふゆされば、ふゆかたまけて、 たそがれどき 、あらたま…むかしべ、うつせみのよ、けさのあさけ、あさなけに、あささらず、あさにけに、おほぬさ、いやひけに、うばたまのくろかみ、うばたまのゆめ、うばたまのゆめ…むばたま、ゆふかたまけて、ゆふかたかけて、さぬるよは、よをながみ、ひぐらしに、あかつきくだち、よくだちて、あさゆく、くるとあく、よなよな、あさなあさな、あかときのかはたれどき、しのめ、いなめ、たまくしげ、あからびく、つかのま、たまゆら、いささめ、いさなみに、たまのを、すがのね、とこよべ、おいがよに)、 坤儀部	
俊頼髓脳・異名	天、地…衣、枕、年、月、日、 時 、旬、春、夏、秋、冬、 朝 、 夕 、 夜 、 夢 、 曉 、京、田舎…天、地、月…、 簾 、 夏 、 曉 、風…	
奥義抄・物異名	天、日、月、雨… 巖 、道、庭水、京、平城宮、内裏、春、夏、 朝 、 時 、 曉 、腕…	
初学抄・物名	天、日、月、星、雲、風、雨、霧、霜、雪、樹雪落、時、春、夏、 曉 、 朝 、 朝夕 、 晩 、地、山、峯、野、田、道、高岑、河、 巖 、砂、海、水海、浪、潮、貝、庭水、泡、京、平城宮、内裏、人形、屋、垣、戸、床、神、祓、帝、院、春宮、后、大臣、近衛、中将少将、衛門、兵衛、侍従、父、母、父母、兄弟、男、童、女、若女、夫、婦、賤男、賤女、海人、盗人、髪、鬘、綾、絹、布、衣、糸、筵、枕、匣、櫛、篋、鏡、金、書、筆、車、船、簾、和琴、酒、弓、笠、別、菓、[木]…[草]…[鳥]…[虫]…[獸]、氷、水、火、一月…十二月	秀句・似物も天象型
和歌色葉・上・七	天象部、 地儀部 … 時節部 (春、夏、秋、冬、 霄 、 曉 、 朝 、 晩 、正月…十二月)…	
同上続き・別の詞	天具、時具(さよなか 、 あけ たてば、ひをりの日、つと、 あさけ 、 ゆふかたま く、	→天象型

づかひに凡そ八の具あるべし	つかのま, たまゆら, 月なみ, 日なみ, はるかけて, あか月かけて , としのを, いやとしのは), 地具, 生具(うれ, ほつえ…), 水具, 畜具, 人具, 雑具	
八雲御抄・第三	… 時節部 (春, 夏, 秋, 冬, 年, 月, 日, 暁 朝 夕 夜 , 時, 旬, 正月…十二月) …	
文鳳抄	天象部, 歳時部(春, 早春, 雑春, 暮春, 三日, 三月尽…九月尽, 早冬, 雑冬, 仲冬, 歳暮, 千年, 万年, 遐年, 暁 朝 昼 夕 終日 夜 終夜 暁夕 朝暮 昼夜)…	
色葉字類抄・上・伊	天象付歳時(雷…月暈, 月院/古, 以往…嘗, 昔, 今…), 地儀付居処并居宅具…	読み・注略 イ・ア・ヒ 以外も同様
同・下・阿	天象付(天…沫雪, 天上, 天辺/秋, 商, 朝…晨 , 明日… 暁 曙 …), 地儀付…	
同・下・飛	天象付(日, 陽…雹, 早, 昼…電…終日 昼日…陽炎ヒナタ), 地儀付…	
源氏物語麻袋	天部, 歳時部(年, 月, 日, 時, 四時 , 寒暑冷温, 春, 夏, 秋, 冬, 世, 節分, 年号, 正月…十二月, 節, 干支, 夜 次 宵 昼 暁 曙 東暁 明暮 朝 夕 明 頃)…	

他の書もさらに見るべきだが、やはり時間帯を持つことが「日本的な歳時部」といってよかろう。本来「歳時」とは一年についていうものであるが(5節「歳時」参照)、時間帯は一日単位である。時間帯の分類が必要とされるのは、時の流れを重視することの一環といえる。

4. 四季の位置づけ

4.1. 歳時部と四季との関係

四季が、歳時の一部であるか、全体の枠組みとなるかの違いがある。

【四季独立型】

*北堂書鈔	…天部, 歳時部一(惣篇, 律篇, 歴篇, 五行篇, 歳篇, 閏篇), 歳時二(春, 夏, 秋, 冬), 歳時三(元正, 祖, 蜡臘, 伏, 臘, 小歳会, 三月三日, 五月五日, 七月七日, 九月九日, 春分, 秋分, 夏至), 歳時四(冬至, 寒, 熱, 豊稔, 凶荒), 地部
*芸文類聚	天部上, 天部下, 歳時部上(春, 夏, 秋, 冬), 歳時部中(元正, 人日, 正月十五日, 月晦, 寒食, 三月三日, 五月五日, 七月七日, 七月十五日, 九月九日), 歳時部下(社, 伏, 熱, 寒, 臘, 律, 曆), 地部…
*初学記	天部上, 天部下, 歳時部上(春, 夏, 秋, 冬), 歳時部下(元旦…冬至, 臘, 歳除), 地部上…
*白氏六帖	第一卷(天…律歴), 第二卷(律呂, 雲, 雨…霜), 第三卷(霧, 氷, 火, 灰, 塵, 叙 四時 , 春, 夏, 秋, 冬), 第四卷(歳陽, 歳名, 月陽, 寒, 熱, 陰陽, 元日, 人日, 正月十五日, 晦日, 社日, 中和節, 寒食, 三月三, 五月五, 伏日, 七月七, 七月十五, 九月九日, 歳除, 閏月, 臘) …
*太平御覧	天部一～一五, 時序部 一(律, 曆), 同二(五行, 四時 , 閏, 歳, 歳除), 同三～一三(春上中下, 立春, 春分, 夏上中下, 立夏, 夏至, 秋上下, 立秋, 秋分, 冬上下, 立冬, 冬至), 同一四～一八(元日, 正月十五日, 晦日, 中和節, 社, 寒食, 三月三日, 五月五日, 伏日, 七月七日, 七月十五日, 九月九日, 臘, 小歳), 同一九(熱, 寒), 同二〇(豊稔, 凶荒, 旱), 地部一…
千載佳句	四時部 (立春, 早春, 春興, 春暁 春夜 , 暮春, 送春, 首夏, 夏興, 夏夜 , 苦熱, 避暑, 納涼, 晩夏, 立秋, 早秋, 秋興, 秋夜 , 暮秋, 初冬, 冬興, 冬至, 冬夜 , 歳暮), 時節部 (元日, 寒食, 三月三日, 七夕, 八月十五夜, 重陽), 天象部…

【四季全体型】

*事類賦	天象部, 歳時部上(春, 夏), 歳時部下(秋冬) …
古今和歌集	春歌上, 春歌下, 夏歌, 秋歌上, 秋歌下, 冬歌…
古今六帖	歳時部・春(春立つ日, 睦月, 朔の日, 残りの雪 , 子の日, 若菜 , 白馬, 仲の春, 弥生, 三日,

第一帖	春の果て)、夏(首の夏、衣替、卯月、 卯の花 、神祭、皐月、五日、 菖蒲草 、水無月、夏越の祓、夏の果て)、秋(秋立つ日、初秋、七夕、朝(きぬぎぬ)、葉月、十五夜、駒牽、長月、九日、秋の果て)、冬(初冬、神無月、霜月、神楽、師走、仏名、閏月、歳の暮) 天(天の原、照る日、 春の月 、 夏の月 、 秋の月 、 冬の月 、雑の月、三日月、夕月夜、有明、夕闇、星、 春の風 、 夏の風 、 秋の風 、 冬の風 、山風、嵐、雑の風、雨、村雨、時雨、夕立、雲、露、霜、雪、霰、氷、火、煙、塵、鳴神、稻妻、陽炎) …
類聚古集	卷一春部(霞、残雪、子日、佐和良妣、若菜…藤)、卷二夏部、卷三秋部、卷四冬部、卷五天部…
和歌童蒙抄	天部(天、日、月、 春月 、 夏月 、 秋月 、 冬月 、風、雲、雨、 春雨 、 五月雨 、 時雨 、霞、露、霧、霜、雪、霰)、 時節 (春、夏、秋、冬)、地部…
夫木抄	春部、夏部、秋部、冬部、雑部
和漢朗詠集・上	春(立春、早春、春興、春夜、子日付若菜、三月三日、暮春、三月尽、閏三月、鶯、霞、雨、梅付紅梅、柳、花付落花、躑躅、藤、款冬)、夏、秋、冬(初冬、冬夜…霜、氷付春氷、雪、霰、仏名)
本朝麗藻	上巻(春、夏、秋、冬)、下巻(雑題部)
江吏部集	天部、 四時部 、地部…
本朝無題詩	卷一(行幸、宴賀付賀勸学院新成、尚齒会)、卷二(天象、 時節 、 地儀 、植物、動物、人倫、雑物、屏風付画障)、 卷三(花下、月前、七夕付後朝) 、 卷四(春付閏三月、夏) 、 卷五(秋、冬付歳暮、雑部) 、卷六(水閣…)、卷七(山家…) …卷十(山寺下、雑寺、禅房、山洞)
文鳳抄	天象部、歳時部(春、早春、雑春、暮春、三日、三月尽、早夏、雑夏、端午、避暑、晩夏、早秋、七夕、雑秋、仲秋、暮秋、九日、九月尽、早冬、雑冬、仲冬、歳暮、千年、万年、遐年、 暁 …)

中国の類書は『事類賦』のみ【四季全体型】で、その他は【四季独立型】である。

【四季全体型】においては、四季が歳時やその分類において最重要視されている。これも、日本の類書の特徴といえるだろう。漢詩集にも見られることに注目しておきたい。そのうちの『古今六帖』について高橋亨氏は、各季に「節日と暦月と年中行事(節会)と景物とが混在している」ことに注目し、『歳時』の複合性と呼ばれている(注8)。但し、歳時部が四季や節日や年中行事を含むこと自体は、中国の類書と同じである。『古今六帖』に特徴的なのは、四季を上位とし、歳時部全てを四季で括っていること(これは『事類賦』の例があるが)、それと、歳時部に「景物」(動植物・天象、次項参照)を含むことである。

また、『千載佳句』は【四季独立型】であるが、中国の類書のような「歳時部」の一部分ではなく、節日や年中行事を集めた「時節部」とは別に、「四時部」を立てて首巻としている。これもまた四季重視の結果といえる。

4.2 四季部と天象との関係付景物

天象が独立した部としてある【天象独立型】と、四季部に含まれる【天象四季融合型】とがある。

【天象独立型】は、例えば上で触れた『千載佳句』が、「四時部」「時節部」の後に回しているが、「天象部」を独立して持っていた。また、『類聚古集』も「天部」が後にあるが、四季部にも景物として天象がかなり含まれている(『古今六帖』は「残りの雪のみ」)。逆に『古今六帖』『和歌童蒙抄』は、天象部にも四季分類が見られた。これらも別の意味で「天象四季融合」といえる。四季の重視と、天象部という規範的な分類概念と、その両立を目指した努力の跡が見られるのである。いずれも和書のみ現象である。

【天象四季融合型】には、『古今集』『和漢朗詠集』『本朝麗藻』がある。『古今集』については、新井栄蔵氏が夙に、各季が「歳時部—景物部—歳時部」という配置になっており、「天象」が「歳時」にも「景物」にも含まれていると指摘された(注9)。『和漢朗詠集』は、巻下冒頭にも「風、雲、晴、暁…」と天象が置かれているが、多くは巻上の各季の後半の景物(天象や動植物)に分散している。「天」を持つ『古今六帖』よりも一層、自然全てを四季で括った『古今集』寄りである。さらに『本朝麗藻』は、各季の中に歳時(節日)と景物とが混在してお

り、歳時と景物とを前半・後半に分けた『和漢朗詠集』よりも一層『古今集』など勅撰集の排列に近いことを、佐伯氏が指摘されている。『古今集』には新井氏らが指摘されたような法則性があり、少なくともこの点では『本朝麗藻』よりも節日と景物を前半・後半に分けた『和漢朗詠集』に近いことになる。つまり、次のような関係である。

なお、繰り返し述べたように、多くの歌学書は、①の『藝文類聚』等の中国の類書と同じである。歌言葉の分類は基本的に中国的な規範に則る一方で、歌そのものの歌集や歌合などの構造は⑤の日本独自の体系(四季以外は恋・雑)が保たれた。③の類題歌集はその折衷となっている。

	①『藝文類聚』	→②『千載佳句』	→③『古今六帖』	→④『和漢朗詠集』	→⑤『古今集』	→⑥『本朝麗藻』
天象	独立した部で最初	独立した部で後	独立した部で後	各季に分散と下巻最初	各季に分散	各季に分散
四季	歳時部の一部	一部だが別立て前	歳時部全てと天に	歳時部全て	歳時部全て	歳時部全て
節日	歳時部の一部	一部だが別立て次	四季に分散	各季の前半	各季の前後	各季に分散
動植物	独立した部で最後	独立した部で中間	独立した部で最後	各季後半と下巻最初	各季の中間	各季に分散

なお「景物」の語は、新井氏のいわれたように天象を含む。『日本国語大辞典 第二版』(以下も第二版)は、「四季折々の情趣ある事物。自然の風物。景色。風景。光景」とし、『俳諧名目抄』に拠って「俳諧では、特に、雪・月・花・郭公を四箇の景物といい、これに紅葉を加えて五箇の景物ともいう」と続け、例には鮑照・舞鶴賦「氛昏夜歇，景物澄廓，星翻漢廻，晓月将落」と、『文華秀麗集』上・秋日冷泉院新林池探得池字応製・淳和天皇「景物仍堪遊聖目。何劳整駕向瑶池」を挙げている。『類聚古集』の長歌の分類にも、まず「四季景物」とあった(1節参照)。「白氏文集」にも六例見られる。後集の例を挙げておく。

卷五十一・2196・郡中西園「閑園多芳草，春夏香靡靡。深樹足佳禽，旦暮鳴不已。院門閉松竹，庭徑穿蘭芷。愛彼池上橋，独来聊徙倚。魚依藻長樂，鷗見人暫起。有事舟随風，尽日蓮照水。誰知郡府内，景物閑如此。…」
 卷六十五・3213・閑園独賞「午後郊園静，晴来景物新。雨添山氣色，風借水精神。…」
 卷六十六・3278・八月三日夜作「露白月微明，天涼景物清。草頭珠顆冷，楼角玉鉤生。…」

つまり「景物」は、改めていうまでもないが、2節の【自然・人事型】で述べた天地と動植物という自然を、特に季節感を伴う文脈で表現する場合に用いられる語である。「節物」ともいう。

5. 部門名(部類標題)

5.1 天地を表わす語

5.1.1 乾象と坤儀

天象については「天」「天象」「乾象」があり、「地」「地儀」「坤儀」に対する。これらの組合せのうち、以下の表にも示したように、【天・地】あるいは【天象・地】が、和漢共に多い。また、【天・坤儀】や【乾象・地】は見当たらなかった。なお、『千載佳句』の「天象部」「地理部」の組合せは他に未見だが、「地理部」は『類聚古集』卷十七の長歌の分類や、次項でふれる『源氏詠』などの例がある。本稿では詳しく扱わない。

知られるように「乾・坤」は『易』の八卦のうちの二つで、天・地、陽・陰、北西・南西、男・女、日・月に当たる。「乾象」と「坤儀」は、それぞれを二字熟語としたものである。呉で用いられた『乾象曆』という暦もあるが、『大漢和辞典』には『後漢書』郭太伝「夜觀乾象，昼察人事」と、『旧唐書』卷三十・音楽志三「大矣坤儀，至哉神鼎」が挙げられている。『日本国語大辞典』の挙げる『続日本紀』天平宝字二年(758)八月庚子条「損乾德於坤儀，鴻基遂固」、『本朝文粹』卷三・弁山水・大江澄明(朝綱長子)「竊以坤儀成形。三山五岳鎮天下，而錯峙」は、『口遊』以前の日本の例である。これらは部門名(部類標題)としては珍しいが、次のような詩語としての例もある。『李嶠百二十詠』に用いられた理由の一つであろうか。

『全唐詩』卷八八三(『全唐詩逸』)・遊小洞庭・白居易「湖山上頭别有湖，菱荷香氣占仙都。夜含星斗分乾象，曉映雷雲作画圖。…」

『全唐詩』卷七五五・光穆皇后挽歌三首ノ一・徐鉉「仙馭期難改，坤儀道自光。閔宮新表德，沙麓旧膺祥。…」

『口遊』の門名が『李嶠百二十詠』と共通することについては、『口遊註解』（幼学の会編，平9，勉誠社）に次のような指摘がある（同書「口遊の門名と先行資料部門対照表」も参照）。但し，1節にも掲げたように，冒頭は「天，歳時，地」で始めるのが一般的で，『李嶠百二十詠』のように天地が続くのは例外的である（歌学書には見えるが）。

『初学記』『藝文類聚』『白氏六帖』などの中国の一般的な類書は，冒頭を「天，地」の形で始めており，「乾象」という部門を冒頭に置く配列を採用した書物としては，本書の序に引かれている『李嶠百二十詠』があげられる。本書が冒頭を「乾象門」という門名で始めるのは，同じ幼学書である，この『李嶠百二十詠』に倣ったものか。…ただし，『百二十詠』は「乾象」に次いで「坤儀」の部を設けるのに対し，本書ではそれを後ろに回し，次いで「時節門」を設ける。

また，『擲金抄』絶句部の目録は「天象」だが，本文には「乾象」とあり，「地儀」（後述）に対しては。これらは漢詩文の幼学書であるが，歌学書にも「乾象」「坤儀」の例が見られることが注目される。『綺語抄』は「天象」に対して「坤儀」を用いている（『百詠和歌』も「坤儀」以下の十一題は同じだが「乾象部」だけは「天象部」に変えられているので，『綺語抄』と同じである）。また，『綺語抄』とほぼ同時代の保安元年(1120)以前に成立した『類聚古集』（別名『類聚万葉集』）は，藤原敦隆が『万葉集』を分類したものであるが（注10），上野氏が紹介されたように，巻五は「天地部」だが東歌を分類した巻十六は「乾象部」「坤儀部」となっている。

これらは，『李嶠百二十詠』や『口遊』の影響を受けたものであろう。両書が幼学書として貴族の間に普及していたことは，『蒙求和歌』と共に『百詠和歌』があることや，『権記』寛弘八年(1011)十一月二十日条「良経来請和名類聚抄四帖，口遊一卷，自臨故兼明皇子書一卷。皆与之。…」からも知られている。良経は，同年八月二十三日甲子に元服したばかりの，記主行成の息子（幼名官犬）である。彼に請われて行成は，『和名類聚抄』や自ら書写した前中書王兼明親王の書（詩文集か）一卷と共に『口遊』を与えた。

「乾象」や「坤儀」が用いられたのは，他にも，天地を二字熟語で揃えようとしたことが理由として考えられる。さらに，【天象型】という点で中国の類書志向が強い歌学書の中で，スタンダードなものより一層漢文学に接近した用語が「乾象」や「坤儀」だといえるだろう。

	天	天象	乾象
地	『類聚古集』巻五，『童蒙抄』目録，『拾遺愚草』十題和歌，和漢多数	和漢多数	×
地儀	『和歌童蒙抄』本文	『本朝無題詩』，『擲金抄』絶句部目録，『明文抄』，『色葉字類抄』，『和歌色葉』，『秋篠月清集』十題和歌，『八雲御抄』	『擲金抄』絶句部本文
坤儀	×	『綺語抄』，『百詠和歌』（表に掲げず）	*『李嶠百二十詠』，『口遊』，『類聚古集』巻十六

5.1.2 地儀

天に対して地を表わす二字熟語は，「坤儀」の他に「地儀」がある。「地儀」の例は，管見に入った書の中では，成立年代からいうと十二世紀始め（明治書院『和歌文学大辞典』によると1118～1127年）に成立した『和歌童蒙抄』が最も早い，「天」との対であった。【天象・地儀】の対は，古辞書『色葉字類抄』（前田本，1144～1181年）や，それとほぼ同じ頃に成立した歌学書『和歌色葉』及び詩集『本朝無題詩』の例が早い。その後の例も含めると，【天・地】や【天象・地】に次いで多い組み合わせである。

詩学書の『擲金抄』絶句部目録や同じ孝範編の『明文抄』にも見えるのだが，「地儀」はおそらく日本的な用語であろう。平安時代の漢詩文でも用いられていないようである（注11）。『漢語大詞典』や『大漢和辞典』の熟語にも見えず，『日本国語大辞典』も「漢語」とはせず，室町時代の『撮壤集』と『運歩色葉』を挙げるのみで，中国の

例は無い。但し『佩文韻府』は、元の除世隆の広寒殿上梁文(上棟式の祝文)の「地儀厚配于長秋, 天位普臨于諸夏」を引いている。漢語に無いわけではないが、熟語としてあまり用いられていないようである。

しかし、角川書店『古語大辞典』が『為兼卿和歌抄』「大かたは天象地儀はその字を礎によめ」を挙げているように、中世以降の歌題には散見する。その早い例が、特に虫題などに『枕草子』の影響が指摘されている、良経・定家・寂蓮らによる建久二年(1191)冬の『十題百首』である。『秋篠月清集』(『新編国歌大観』201~300番)では「天象十首, 地儀十首, 居所十首…」となっている。但し、『拾遺愚草』(701~800番)は「天部十首, 地部十, 居所十…」とする。これらからもわかるように、まず「天・地」が対であり、天は二字ならばやはり「天象」が一般的で、それと字数も含めて対としてよりふさわしい語として「坤儀」よりも「地儀」が好まれ、地と同義の二字熟語として定着したのであろう。

5.2 歳時部及びそれと同義の語

5.2.1 歳時

歳時部には、前掲の和漢の類書において、「歳時」の他に「時節」「四時」「時序」がほぼ同義で用いられていた。

まず「歳時」については、高橋氏が、『礼記』に見えるが日本の現存する部立では『類聚国史』が初見であろうことを述べ、『和名類聚抄』(二十卷本)巻一「歳時部第四」の例を平安中期の数少ない例の一つとして挙げた上で、『古今和歌六帖』第一帖の「歳時部」に注目されている。なお『類聚国史』の「歳時」とは全て年中行事である。

確かに、『荊楚歳時記』という書もあり、『北堂書鈔』『藝文類聚』『初学記』『事類賦』は全て「歳時部」で、部名としては「時節」よりも一般的であるが、日本で用いられた早い例は『類聚国史』『和名類聚抄』『古今六帖』であり、「歳時」は十世紀中に日本語として定着した語といえるだろう。

『日本国語大辞典』「歳時」の項では、②「一年中のおりおり。きせつきせつ。また、季節・四季」の例に『礼記』哀公問「歳時以敬祭祀, 以序宗族」を挙げ、①「としととき。年と季節」の例に『春秋左氏伝』昭公七年「公曰、何謂六物。対曰、歳時日月星辰, 是謂也」を挙げている。①については『大漢和辞典』も同じで、『左氏会箋』の「…時, 謂四時也」に拠り、「年と時。歳は一歳, 時は四時」と明記している。『漢語大詞典』も、①「一年, 四季」とし、『周礼』春官・占夢「掌其歳時, 觀天地之会, 弁陰陽之氣」及び『鄭玄注』「其歳時, 今歳四時也」以下の例を挙げている。「時」は一日の区分を表わす語でもあるが、熟語「歳時」における「時」はそうではない。

つまり「歳時」という語は、本来、一年単位で時間を捉えた語であり、前節で見たような一日の時間帯を含む語ではない。それを自覚しているためか、時間帯を含む書で部名を持つ物は殆ど「時節」を用いていた(『綺語抄』『和歌色葉』『八雲御抄』)。しかし平安時代の書では『色葉字類抄』と『文鳳抄』が、「歳時(部)」としながら時間帯を含んでいる。前述した『本朝無題詩』や『擲金抄』における「地儀」の語の使用と併せて、漢文学の正統的な用語からは外れた例として指摘できよう。その外れた方向にあるのは歌学の世界である。

なお中国の類書は、「歳時」の他に、宋代の『太平御覽』のみ「時序」を用いているが、和書の例は未見である。

5.2.2 時節

和書では、「歳時」以外に、「時節」も部名として散見する。この語自体は、前項の「地儀」とは異なり、漢詩文ではよく用いられる。『大漢和辞典』は「四時の氣候。四時の節序。又、とき。をり。季節」として、『史記』天官書「摂提者, 直斗杓所指, 以建時節。故曰摂提格」を挙げ、『日本国語大辞典』は「一年のうちで、移り変わってゆく天候や風景などによって感じられるその折の季節。時候」として、裴説・春早寄花下同人詩「正是花時節, 思君寢復興」と『懷風藻』七夕・吉智首「全冉冉逝不留, 時節忽驚秋」を挙げるが、白居易も多数用いている。中でも『白氏文集』巻六十五・3168・新秋喜涼の尾聯「光陰与時節, 先感是詩人」が特に知られているだろう。藤原師輔の日記『九曆』逸文にも、「故実, 新任饗, 随時節寒熱, 設湯漬・水飯」という一節があり(『大日本古記録』234頁)とあり、詩語としてだけでなく平安時代に用いられていたことがわかる。

しかし部類標題としては、前稿でも述べたように、『法苑珠林』巻第一・却量篇第一・第二大三災が「此有四部」として「時量部, 時節部・時節部第二, 壊却部, 成却部」を下位分類として持つので、中国の例が皆無なのではな

いが、日本ほどには見られない。日本の場合、漢詩(句)文集では『千載佳句』『口遊』『本朝無題詩』『本朝文粹』、歌学書では『綺語抄』『和歌童蒙抄』『和歌色葉』『八雲御抄』に見られる。「時節部」という部名もまた、日本的な用語といえるだろう。『千載佳句』において、類書の「歳時部」から「四時」を取り出し、その他を表わす語として用いたのが日本における部類標題としての使用の最初であろう。そして、その直後の『口遊』が用いたことで、平安後期の諸書に影響を与えたと考えられる。類聚編纂物というと『和名類聚抄』に倣ったといわれることが多いが、『千載佳句』、さらに『口遊』の影響も看過できない(注12)。また、前述したように、時間帯を含めようとして「歳時」を避けて選ばれたという経緯も考えられる。

5.2.3 時候

表には挙げていないが、後藤氏の「古辞書と類聚的『源氏物語』注釈書の分類標目」によると、中世以降、「歳時」(『源氏物語麻袋』)、「時節」(『下学集』『節用集』)、「四時」(『撮壤集』)の他に、「時候」も部門名として用いられるようになった。その中で最も早いのが、1306年自序、1307年跋の『聚分韻略』「乾坤門、時候門、気形門、支体門…」で、延宝八年(1680)刊『近世節用集』「天地部、時候部、居宅部…」が続き、影響関係にあるとされる十八世紀後半の『源氏詠』に「天文地理時候」、『源氏梯』『源語類聚抄』に「天地時候」のように用いられている。『聚分韻略』は他の門名も独特であり、「時節」も一般的との理由で避けられたのではないか。

なお「時候」は、『大漢和辞典』『日本国語大辞典』でも「時節」と同義とされ、後者は梁簡文帝の与劉綽書「玉霜夜下，旅雁晨飛。想涼燠得宜，時候無爽」と『続日本紀』靈龜元年(715)十月乙卯条「尽力耕種，莫失時候」を挙げているように、部名以外では以前から用いられている。

5.2.4 四時

「四季」と同義で用いられる語に「四時」がある。『千載佳句』の冒頭の部名である。三木雅博氏が、部門の構成の『古今集』との近さと共に、「四時」が『白氏文集』中の詩語であることを指摘されている(注13)。『新撰万葉集』序に「四時之歌」とある(知られるように、『新撰万葉集』は当時の歌合と同じく四季と恋で成り立っている)。その他『白氏六帖』『太平御覧』にもあり、『延喜式』でも用いられている。確かに詩語でもあるが、四季を表わす一般的な漢語として頻出する。一方「四季」は、『白氏文集』巻四・新楽府・0161・陵園妾の「四季徒支妝粉錢，三朝不識君王面」のように用いられないわけではないが、稀である。

『千載佳句』は「四時部」の後に「時節部」もあったが、『江吏部集』では「歳時部」や「時節部」に代わるものとして「四時部」がある。用語自体は、佐伯氏が指摘されたように『千載佳句』の影響であろう。『類聚古集』の長歌の分類の「四時景物，地理部，人倫部…」も、『江吏部集』と同じ四時部＝歳時部の例である。享徳三年(1454)序の古辞書『撮壤集』も「四時部」であるが、後に「年中行事」が続いており、むしろ『千載佳句』に近い。

このように、日本の類書の歳時部は、内容だけではなく、部門名自体にも工夫や変遷があることが特徴的である。

6. まとめ

ここまで、配列順や分類方法、及び部門名についてのパターンを見てきた。

2節…何部から始まるか→【天象型】【歳時型】【帝王型】【神祇型】

全体の中での人事の位置→主なものは【人事間型】【人事後型】＝【動植物前型】【動植物間型】＝
【無生物・生物(人から動植物まで)型】【自然(天地から動植物まで)・人事型】

動植物の順→主なものは【植・動物型】【動・植物型】

3節…時間帯が何部にあるか→【時間天象型】【時間歳時型】

4節…歳時部と四季との関係→【四季独立型】【四季全体型】

四季部と天象との関係→【天象独立型】【天象四季融合型】

5節…部門名のうち、天地部の用語「乾象・坤儀」「地儀」、歳時部の用語「歳時」「時節」「時候」「四時」

天・地の組合せの主なものは【天象・地】【天・地】【天象・地儀】【乾象・坤儀】

本稿で取り上げた範囲でいうと、中国の類書は、隋代の『北堂書鈔』が【帝王型】である以外、全て【天象型】で、【歳時型】は無い。『北堂書鈔』は、動植物の部が無い点でも独特である。また、【人事後型】＝【動植物間型】＝【自然・人事型】は、『李嶠百二十詠』のみである。『李嶠百二十詠』は、天地部を「乾象部」「坤儀部」とする点も他と異なる(歳時部も無い)。その他の天象部や歳時部の用語は、『太平御覧』の「時序部」以外、例外的なもの無く、継承性が高い。また時間帯は、『白氏六帖』の天象の中の「晨夜」のみで、他には分類項目(門)として取り上げられていない。つまり中国において、言葉や漢詩文を、一日の時間帯によって分類する必要が感じられなかったといえる。なお『白氏六帖』は、「律歴」を天象の中に置くこと、部名を持たないことも、他と異なる。また、歳時部の大分類を四季とする【四季全体型】は『事類賦』のみで、他は歳時部の中に四季と節日とが別々にある【四季独立型】であり、特に四季が優先されているわけではない。なお『事類賦』は、動植物の順も「禽、獸／草木、果／鱗介、虫」となっており、和漢共に【植・動物型】が一般的な中で、独特であった。このように、『北堂書鈔』『李嶠百二十詠』『白氏六帖』『事類賦』『太平御覧』は、若干他と異なる点があるので、最も規範的・標準的な類書は『藝文類聚』『初学記』ということになる。

一方、日本の類聚編纂物(広義の類書)は、【天象型】と【歳時型】の両方がある。『万葉集』の雑歌や歌学書も前者である一方、秀句集や漢詩集の『和漢朗詠集』『本朝麗藻』は『古今集』と同じく後者である。しかも【歳時型】の中には、『古今集』『和漢朗詠集』『本朝麗藻』のように、天象部自体を持たないものもある(動植物部も無い)。これらの書においては、天象は歳時と並ぶものではなく、歳時部に「景物」として含み得るものとされているのである(【天象四季融合型】)。さらに【歳時型】で後に天象部を持つものの中にも、『古今六帖』『類聚古集』のように、歳時部(四季部)の中にも天象を含むものがあつた。また、【天象型】【歳時型】に限らず、日本の歳時部は、中国とは逆に【四季全体型】が一般的で、節日と四季を同列に見るのではなく、四季が上位概念とされている。『千載佳句』は例外的に「四時部」と節日の「時節部」に分ける【四季独立型】であるが、「四時部」を先としている。また『古今六帖』や【天象型】の『和歌童蒙抄』は、天象部の中にも四季分類があつた。これも中国の類書には見られない。以上は全て、四季重視という点で一貫している。

また、中国とは異なり【人事後型】＝【動植物間型】＝【自然・人事型】が少なからず見られる。動植物の順は中国も日本も【植・動物型】がほとんどなので、【人事後型】は、天地から植物そして動物までの自然、それと人という順序になる。これは、天象と動植物を四季の景物として同列に扱う姿勢と繋がるのではないかと。

また、歳時部に一日の時間帯を表わす語を含む【時間歳時型】が少なくないことも、日本の類書の特徴であるが、これは時の移ろいを重視する点で、上で述べた四季の扱いに通じるといえよう。

部門名については、『李嶠百二十詠』の天・地を表わす「乾象」「坤儀」を『口遊』が採用し、『類聚古集』『擲金抄』『綺語抄』などが継承した。また日本独自の表現として、「天象」「地儀」の対が『和歌童蒙抄』、そして『色葉字類抄』『和歌色葉』『本朝無題詩』以下に見られ、「地儀」は「地」と同義の二字熟語として歌題にも用いられるようになる。『擲金抄』絶句部目録や『明文抄』も用いていた。

歳時部については、『類聚国史』や『二十卷本和名類聚抄』『古今六帖』が中国の一般的な「歳時」(一年と四季を表わす)の語を取り込んだ。『色葉字類抄』『文鳳抄』が、「歳時」としながら時間帯を含む早い例である。つまり、歳時部を全ての時の流れ、時間に関する部と捉えているのである。『本朝無題詩』や『擲金抄』における「地儀」の語の使用と併せて、儒家・起家を問わず、学者による類聚編纂物における漢文学の正統的な用語からは外れた例、そして歌学に近づいた例といえるのではないかと。また、『千載佳句』が歳時部のうち節日のみを表わすために、詩語でもあるが部門名としては中国ではほとんど用いられていなかった「時節」を採用し、次いで『口遊』が歳時全体の名称として「時節門」を用いて以降、『本朝無題詩』『本朝文粹』も中国の類書の「歳時」ではなくこれを用い、また主に時間帯を含む歌学書の使用を経て、広く「時節部」が用いられるようになる。さらに鎌倉末期の『聚分韻略』には「時候門」が見え、これも引き継がれる。『千載佳句』の「四時部」も、『江吏部集』『類聚古集』以下に見られる(後者は「地理」も採用している)。このように、部門名は継承性もあるが、独自性も強いといえる。また、類聚編纂物という『和名類聚抄』の影響がまず指摘されるが、部門名においては『千載佳句』や『口遊』の影響力の大きさも改めてうかがえた。

全体を通して日本の類書についていえるのは、中国の典型である『藝文類聚』『初学記』と全く同じものはないということ(『扶桑集』は推定によるので含めていない)、四季、そして一日の時間帯といった時の移ろいが重視されていること、平安中後期の詩文集・詩学書が全て何らかのかたちで中国の類書から離れ、和歌の世界に接近していること、和歌の分類の典型としては『古今集』などがあるが、逆に歌学書・歌題が漢文学の分類や用語を志向していることである。

注

- (1)拙稿『枕草子』初段と和漢の類書的首巻部類標題の関係についての覚書(『和漢古典学のオントロジ』1, 平16・3), 同『枕草子』初段「春は曙」の段をめぐる一和漢の融合と紫の雲の象徴性―(『むらさき』41, 平16・12), 同『枕草子』「は」型類聚章段と和漢の類書の比較・対照―三巻本・前田家本と『藝文類聚』『倭名類聚抄』を中心に―(『和漢古典学のオントロジ』2, 平17・3)。
- (2)佐伯雅子氏『本朝麗藻』の分類意識(『和漢古典学のオントロジ』1, 平16・3)。以下、佐伯氏の論は、これに拠る。他氏も同様。
- (3)上野理氏「枕草子初段の構想と類書の構造」(『国文学研究』50, 昭48・6)。「火」「灰」が天象部に含まれるという指摘もあるが、その点は本稿では措く。なお、藤本一恵氏「枕草子随想的章段―その単純にして複雑なるもの―」(『鑑賞 日本古典文学 第8巻 枕草子』昭50, 角川書店)にも同様の指摘がある。
- (4)『日本国語大辞典』は、例として田中義廉『小学読本』(1873)の「神は万物を造り給ひ、殊に太陽を造りて、動植物の生育を遂げしむ」を挙げている。
- (5)平井卓郎氏「白氏六帖を媒介としての古今六帖私考」(『国語と国文学』32-7, 昭30・7/『古今和歌六帖の研究』「古今和歌六帖の組織」昭39, 明治書院)。氏は、契沖や山本明清が説明したように「天地人の三才」に「草虫木鳥」を添えたのが輪郭だが、「四時」は「歌の本とするところ」なので「天象」の前に「歳時」を置いたともいわれている。
- (6)三田明弘氏『太平御覧』「妖異部」をめぐる考察(『和漢古典学のオントロジ』2, 平17・3)。
- (7)後藤幸良氏「近世後期の類聚『源氏物語』注釈書と古辞書」(同上)。
- (8)高橋亨氏「歳時と類聚―平安朝かな文芸の詩学にむけて―」(『国語と国文学』76-10, 平11・10)。
- (9)新井栄蔵氏「古今和歌集四季の部の構造についての一考察―対立的機構論の立場から―」(『国語国文』41-8, 昭47・8/日本文学研究資料叢書『古今和歌集』昭51, 有精堂出版)。なお注(8)の高橋氏は、『古今集』春歌の首尾に「歳時」や「天」の歌があり、間が「景物」の歌であると見られている。「歳時意識による枠どり」という点は新井氏の指摘に通じるが、『古今集』歌を再録した『古今六帖』の部立との対応から逆照射された点が新しい。「景物」については、天象を含むと見るべきだろう。
- (10)『十巻本和名抄』の影響を含め、本文・分類・注記などの特徴や評価については、小島憲之氏の再刊解説(『類聚古集』昭41, 臨川書店)を参照されたい。初版(大2)の佐佐木信綱氏解説にも、「藤原仲実が『綺語抄』と共に辞書分類の影響を承け」とある。敦隆や本書の受容史についても詳しい。
- (11)『菅家文草 菅家後集』『翰林学士集』『紀長谷雄集』『新撰類林抄』『新撰朗詠集』『千載佳句』『田氏家集』『本朝文粹』『本朝麗藻』『文華秀麗集』『凌雲集』『類題古詩』『和漢朗詠集』の各索引を見た。また、ウェブサイト「寒泉」所収の中国の諸書を検索したところ、『太平広記』巻五十三・神仙五十三に、「靈宝清齋告謝天地儀一軸」が見えるのみであった。
- (12)菊池仁氏「辞書論―『口遊』, ならびにその類書としての系譜―」(河添房江氏他編『叢書 想像する平安文学 第3巻 言説の制度』平成13, 勉誠出版)では、「芸能や説話集へと道を拓く」ことを中心に『口遊』の類書史上の意義を種々説かれている。ご紹介の諸氏の論も重要であるが、本稿との関係付けは今後の課題としたい。
- (13)三木雅博氏『千載佳句』の部門の構成に関する考察―冒頭の四時部を対象として―(『講座平安文学論究』第9輯, 平5, 風間書房/『和漢朗詠集とその享受』平7, 勉誠社)。